

明德義塾中学校・高等学校

新シリーズ：「International Boarding School」で学ぶ

第1回 明德義塾の船出

広報入試部長 高橋 聖

「世界に出たい」との夢を抱いた幕末の偉人、坂本龍馬を育んだ土佐の地より、昭和48年4月、道德教育を実践するために男女共学・全寮制の学校として船出をした明德義塾はどこの方角に向かって帆を掲げているのでしょうか。

＜はじめに＞

道德教育、スポーツ教育、外国人留学生に対する第二言語としての日本語教育、そして日本人海外子女に対する母語教育など、明德義塾は時代、時代の要請にもとづき教育の多様化を図ってきました。

そしてその結果、現在では中高生950名のうち3割が海外からの留学生と帰国生で占められた、日本でも有数の国際化された学園に発展しました。

さて、時代とともに生徒の顔ぶれは変化してきましたが、今から38年前の昭和47年に、開学に向けて趣意書に示された明德教育の理念は、それら時代の要請にともなう変化に左右されることなく今に脈々と引き継がれています。

シリーズの第一回目は少しかたぐるしい内容にはなってしまいますが、スポーツでの活躍を中心としたマスコミの報道では決して伝わらない素顔の明德義塾を、趣意書の文面を通じてまずはご紹介させて頂きたいと思います。

開学に向けた「趣意書」

最近の世界の情勢は、全く混沌たるものがあります。日本もまた決してその例外ではありません。日本の立場はこの激動する国際情勢の中で、どうなっていくのか、まことに重大なる時期にさしかかっているのです。

更に思想界の混乱状態は、その極に達し、これに伴う青少年の道德的頹廃は甚だしく、青年による非行不良行為の激増は、前代未聞と称しても、決して過言ではないと思います。

その原因は非常に複雑で、識者の間でも議論のつきないところですが、最も根本的な要因として第一にあげられるべきは、道德教育の問題であります。

従来の道德教育は単なる徳目教条主義であり、ただ教訓を青少年に与えるのみであって、道德を実行する人のみが幸福な人生を開拓し得ると云う科学的裏付けがなく、従って実践とはかけ離れたものになっているのでありま

す。即ち道德教育が正しく行われていないということです。

従って之を救う道としては、道德科学を根幹とした教育を実行し、ニューモラルをうち立てる以外には方法はないと確信いたします。

その中でも、中学校の三年間は、少年期より青年期への移行期であり、肉体的にも精神的にも、急激な成長期であると共に、最も不安定な時期でもあります。

また、最近の中学校の内容は極めて高度なものとなり、この生存競争のきびしい社会において、真に強く、正しく生き抜く社会人となる為に、その影響は甚大であります。

このように、中学三年間は、道德的にも知的にも、むしろその人間の一生を決定する重要な時期にもかかわらず、現在の中学教育の実情は、決して満足すべきものではないと思います。

この欠陥を補い知徳体兼備情理円満の人材を育成する中学校の設立こそ、焦眉の急を要する重大問題として有識者の要望も大なるものがあります。

私たちは、この目的を達成する為に、道德科学を根幹とした、全寮制度の中学校を設立したいと念願しております。

幸いにも、今日まで一七年間、道德科学を根幹とする教育の殿堂として師弟の教育に心血を注いできた明德塾がありますので、之を母体として、私立明德中学校を設立し、大方の要望に応えたいというのが本会の趣旨であります。

自由の発祥地といわれる土佐の地に、日本における最初の試みともいふべき道德科学を根幹とした中学校を創設し、日本の未来を開く青少年の育成を実現したいと切望しております。

この本会の企画に対して、満腔のご賛同ご協力賜わりたく、関係者一同、衷心よりお願いする次第です。

私立明德中学校発起人代表者 吉田幸雄